

ブラジルのおべんとう [中学年4 - (6)]

- 「心のノート」を活用した取組み -

- (1) 主題名 いろいろな国の文化にふれて [4 - (6)] 関連項目 [4 - (5)]
 (2) ねらい 外国の文化にふれることによって、改めて我が国の文化のよさに気付き、大切にしようとする心情を育てる。
 (3) 資料名 「ブラジルのおべんとう」
 (4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 国旗あてクイズをする。	どこの国の旗でしょうか。	世界にはたくさんの国があることに気付かせるとともに、資料に関心を持たせる。
展	2 資料を読み、話し合う。	ダニエラちゃんは、日本にやってきて、慣れるまでにどんなことが大変だったでしょう。 ・ことばを覚えること ・食べ物に慣れること ・日本の学校に慣れること とくいそうにお弁当を見せるダニエラちゃんは、どんなことを思っているでしょう。 ・これはおいしいよ。 ・日本にはない味だよ。 ・これがブラジルの料理だよ。	日本とブラジルではいろいろな面で、違いがあることに気付かせる。 自国の料理を誇りに思うダニエラちゃんの気持ちに気付かせる。
開	3 日本のよさについて発表し合う。	じまんの日本のお弁当をありがとうと言っているわたしは、どんな気持ちだったでしょう。 ・とってもおいしかったよ。 ・わたしはやっぱりおむすびが好き。 ・日本のお弁当もじまんだよ。	ダニエラちゃんのひとことから、自分のお弁当に日本らしさを発見したわたしの気持ちの変化に気付かせる。
終末	4 教師の説話を聞く。	外国の人にはじまんできる日本のものにはどんなものがあるでしょう。 ・和服・さしみ・てんぷら ・たたみ・祭り・すもう・柔道	「心のノート」P86, 87を活用し、食べ物だけでなく、衣・食・住・行事やスポーツなど広い視野で考えさせる。

「アラジンのおべこひ

わたしのクラスには外国から来た友だちがいます。目前はダニーハリちゃんです。ダニーハリちゃんは、一年生の時に、ブラジルからお父さんの仕事のついで日本にやってきました。日本に来たばかりのことは、日本の生活になれてなくて、たいへんだったやうです。

三年生になると、日本語もとつともじょじょになつて、新しいクラスの友だちともすくになかよしになりました。

ダニーハリちゃんは、きゅう食がにがてです。ブラジルで食べてこたりょう理と日本のりょう理ではぜんぜんちがつからです。とくにこがてなのはひとつです。きゅう食でとつふを使つたりょう理が出ると、こまつたよつな顔をしてゆっくり時間をかけて食べてします。わたしは、夏に食べるひややつこはせることなるになどふしおに思こます。もうひとつにがてなのは、日本のお茶です。わたしたちの学校では、毎日すこしどこにお茶を入れて学校へ持つてくるのですが、ダニーハリちゃんはそのお茶がにがてなのだそうです。だから友だちにお茶をあげようつて言われても、「日本のお茶はにがくてのめないよ。」と言つて、のみません。

「この前、ダニーハリちゃんが、

「今日はブラジルのお茶を持つてきたよ。」

といつれしあうにお茶の入つたすいとうをふりました。ブラジルに住んでこゐるおじさんに送つてもらつたのだそつです。わたしは、ブラジルのお茶つてびんなのだろつと思つて、ひとくちのませてもらひました。それは、むさ茶じかといつを入れたよつな味で、わたしにはお茶じやなによつな氣がしました。

「遠足の日のことです。

「今日はブラジルのおべんとつよ。」

ダニーハリちゃんがとくべこやつにおべんとつ箱の入つたリュックサックをポンポンとしたときました。

さあ、出発です。歩いてこくつちに、山道に入りました。道はどんどんせまくなり、急な登り坂が続きます。でもダニーハリちゃんは、ブラジルのおべんとつがよつぱりつれしいのか、はりきつて登つていきます。わたしは、ブラジルのおべんとつとビタなのだろつと思つながら、後ろから登つて行きました。

長く山道を登つきて、よつやくちょっと上の広場につきました。
まちこまつたおべんとつの時間。わたしは、わくわくしながらダニーハリちゃんのおべんとつをのぞきこみました。

「それで、なんてこいつらの理?」
「わたしは、なんぞやれいみたいな豆の料理が入っていました。

「それって、なんぞやれいみたいな豆の料理が入っています。」

「わたしは、なんぞやれいみたいな豆の料理が入っています。」

「フェジョンと云ふだよ。匂を立て作るの。パラジルではなく食べぐるよ。」

「教えてくれました。そして、

「お母さんが作ってくれた、じめんのパラジルのおべんとうだよ。食べていひだよ。」
と言つて味見をさせてくれました。フェジョンは、せんべこのようにあまくなくて、わ
たしがそうめつして、いたのはまつたくちがう味でした。わたしにはふしきな味でした
が、ダーハカヤさんはとてもこのつめつめに食べてこます。二つ目のやまい飯の時とはお
おちがいです。わたしまは、この二つめがり食べてこぬターダーハカヤさんの顔をじしゃくじ
つとながめてこました。

家に帰つて、コロッケサツクからおべんとうを注がれ、お母さんは、「今日のねむくびとたまごは、おこしかったよ。お母さん、じめんの豆の
おべんとうをあつがとへ。」

と言つてました。

お母さんは、ふしきなにわたしを見てこました。わたしは、パラジルのおべんとう
の話をし、ダーハカヤさんのねむくびとたまごを日本の中の何があるか、お母さん
とこつしょに押えてみる」とこつせました。



< ブラジル料理「フェジョン」 >

活用に生かすための実践報告

「ブラジルのおべんとう」

1 主題の設定

子どもたちにとって、自分たちの国について改めて意識する機会は、オリンピックやワールドカップなどのスポーツ大会の時ぐらいで、そう多いものではないと思われる。小学校中学年の段階では、郷土の文化や伝統とのかかわりから視野を広げて、我が国の文化や伝統に関心を持ち、国を愛する心を育てることを目標としている。本資料では、まず、外国から来た友だちが、自分の国の料理の入ったおべんとうを楽しみにしている様子や自慢に思っている気持ちを読み取らせ、それをきっかけに、普段生活している中ではあまり意識していない、自分たちの国の文化について知り、そのよさに気付かせていきたい。

2 指導過程の工夫

「心のノート」P.86, 87を活用することにより、日本の伝統やよさについてより考えやすくなると考える。

教師の説話で、日本の自然や文化遺産について話をすることによって、中学年ではなかなか気付きにくい日本のよさについて気付かせていきたい。その際、写真やビデオ、CDなどを準備しておくと、より効果的である。

3 発問の工夫

最初の発問で、外国から日本に来てその文化の違いにとまどうダニエラちゃんの様子を考えることにより、それぞれの国によって、大きな違いがあることに気付かせる。

外国から来た友だちが、自国の料理について得意そうに話をしている気持ちについて、しっかりと考えさせたい。

中心発問は、自国の料理を自慢に思っている

ダニエラちゃんの姿から、改めて自分のお弁当に日本らしさを発見して自慢に思えるようになったわたしの気持ちに気付かせたい。そこからさらに料理だけでなく、自分たちの国によさを発見していくような展開にしていきたい。

4 児童の反応（授業後の感想）

外国の知らない料理に対する興味から、その国だけではなく、いろいろな国への関心に広がる意見や、日本の料理と比べて考える意見が見られた。また、そこから発展して、自分たちの地域のお祭りや自然・建造物など、日本によさにつながる発言もあった。

- ・日本とはぜんぜんちがうな。
- ・ブラジルのおべんとうってどんなものかな。
- ・日本とブラジルではちがうのかな。
- ・ぼくたちの地域のお祭りでは太鼓をたたくよ。

5 実践者からの一言

日本の自然や古くからある物などに目を向けさせていくことは大切なことだと思う。しかし、中学年の児童にはなかなか難しい面もあるので、視覚にうつたえるものを用意すると、イメージがわきやすいと思う。また、国語の教材で和のよさを扱ったものがあるので、その単元学習後にもってくとよいと思う。

自国の文化を見つめ直す時に、自分たちの住んでいる地域の郷土料理や、伝統行事などから考えを広げていくとわかりやすく、効果的であると思う。

最近は、いろいろな国の児童と一緒に勉強する機会も増えつつある。そうした中で、自分の国を大切にするとともに、外国人々や文化を大切にする子どもを育てていきたい。

（小方小学校 貞盛倫子）